

砂遊びの長期観察から見えてきた保育課題

はじめに

二〇〇四年十月から二〇一一年三月まで、筆者は京都市内の保育園において、子どもたちの砂遊びの観察を行いました。期間中の観察回数は四十五回。砂場及びその周辺も含め、砂を使った遊びの様子をビデオと写真に収め、特に二〇〇五年四月からは当時生後十一ヶ月だった女兒あいちゃんを中心に、同年齢の子どもたちが卒園するまでを継続して記録しました。

この観察から、保育における子どもの砂遊びについて、次のような課題を提起したいと思います。

一つは、長期的な視野から子どもの砂遊びの変化や発達段階をとらえるということです。一般に子どもの砂遊びは、「砂遊び」としてひとくくりにされがちです。しかし、たとえば一歳児期の砂遊びと三歳児期の砂遊び、あるいは同じ年齢でも五月と十二月の砂遊びとでは、子どもの興味や砂への関わり方、遊びのなかの人間関係はかなり違ってきます。到底「砂遊び」の一言では表しきれない多様性が見られます。当然、保育者による環境構成や子どもへの関わりは、それぞれの子どもの様子に応じてなされるべきです。そのためには、長期的な視野による砂遊びの発達のな特徴をとらえ、一定の見通しをもった保育をしていくことが必要であると考えました。

もう一つは、つい漠然と見てしまいがちな目の前の子どもの砂遊びを、どうすればより丁寧なまなざしでとらえることができるのかということです。言葉を換えるならば、子どもの砂遊びを分析的、構造的に把握しながら、総合的にその子ども特有の砂遊びとして関わっていくという課題です。この点について、実は砂遊びは、子どもの様々な能力を多様に引き出す遊びであることに改めて気づきました。そこで、砂遊びと子どもが獲得していく様々な力との関係に注意を向けることが、砂遊びの指導における丁寧なまなざしにつながる一つの方法として提起したいと思います。

本稿では、これら二つの視点から、保育におけるより充実した子どもの砂遊びについて考えます。なお、ここでいう「保育における」とは、入園から修了に至る長期の保育を意味します。

1. 砂遊びの展開 — 五段階の砂遊びフェイズ仮説 —

七年間にわたる観察結果から、砂遊びの展開過程を表1のような大きく5つの段階的フェイズとしてとらえました。長期的な視点から見る子どもの砂遊びの発達課題を明らかにする展開仮説として提示したいと思います。ただし、これは必ずしも年齢との直接的な対応関係を示すものではありません。個人差や経験の違いによる幅があることを前提として五つのフェイズを見ていきます。

(表1 砂遊びの展開仮説) 挿入

(1) 感覚的な出会いとしての砂遊び

生まれてまだ一年も経っていない八～十ヶ月の赤ちゃんたち。初めは、はだしの足裏が砂に触れただけでびっくりしたり、時には泣き出したりすることもありました。一般に、砂の感触こそが砂遊びの魅力と考えられがちですが、最初は必ずしもそうではないようです。

そんなとき、保育者はよく、子どもの目の前で手の平に砂をのせたり、手を傾けて砂を滑り落としたりしながら、まずは砂そのものをじっくりと子どもに見せていました。【写真1】また、カップをひっくり返し、何度も砂型をつくって見せています。砂は瞬時にしてその形を変えますが、このような砂の

視覚的な変化に出会うことによって、子どもは自然にずっと砂に手を伸ばし、自分からの触覚的な出会いも果たします。【写真2】

砂は、子どもの身体を支える大きな環境にもなります。一歳前後の子どもたちが、比較的長時間、砂の上にどんと腰を下ろしたり、はいはいしたりする姿もよく見られました。【写真3】また、まだ足下おぼつかない時期の子どもが、砂の起伏を注意深く踏みしめながら歩きます。一歳半ぐらいになると、自分の背丈ほどに積まれた砂山に一步・一手を慎重に運びながら山頂を目指します。深部感覚と呼ばれる、身体内の筋肉や関節、バランスの調整が必死で行われていることが伝わってきます。【写真4】

砂は子どもの身体をそのまま受け止め、子どもはいろいろな感覚を通して砂と関わり、また自分自身の身体も感じ取りながら、身のふるまい方を獲得していきます。

(写真1~4挿入)

(2) 砂で遊ばない砂遊び

子どもが砂の上に座るようになったとき、空いた両手はどうしているでしょう。砂に触れたり、つかんだり、砂との関わりをどんどん広げているのでしょうか。

観察ではほとんどの場合、子どもは両手もしくは片手に何らかの物を持ち、関心はもっぱら物そのものか、それを使うことに向いていました。この時期の砂遊びは、手が直接砂に触れることよりも、物をこね回したり、振り回したり、物同士を打ち当てたり、そして物を使って砂を掘ったり集めたりします。

【写真5】砂は子どもの直接的な遊びの対象ではなく、物进行操作するための対象として存在しているようです。そこで、このような砂遊びを「砂で遊ばない砂遊び」と名付けてみました。

この命名が適切かどうかを確かめるために、一歳五ヶ月から一歳七ヶ月までの砂遊びが大好きな幼児五名を対象に、砂場にいったい物を置かないという実験をしてみました。すると、やはり物が無い砂場には子どもたちは興味を示さず、数人がすぐに砂場から出て行こうとしました。【写真6】保育者が砂山を作りながら遊びに誘うことで少しは関心を示しましたが、長続きはしません。十分後、そこにいつもの物を持ち込むと、子どもたちはさっとその回りに集まり、自分の好きな物を選び三十分以上遊び続けたのです。【写真7】

このような砂で遊ばない砂遊びを通して、子どもは最初上手にできなかった物の持ち方や扱いをみるみるうちに上達させていきました。手指や手首、腕、肩、手と目の共応、身体バランスを取りながらの操作等、物に応じたあらゆる動きを着実に身につけていくのです。

子どもたちは間もなく、自分が使う物をその形に応じて、主に砂をすくうものとすくった砂をためるものとの機能別の活用を安定的に行います。これは、まさに物の道具としての扱いであり、文化の獲得です。

このフェイズの到達点、そして次のフェイズの始まりともとれる行為として、子ども自身が行う型抜き遊びがあります。これはすでに前フェイズの段階から大人や年長者が何度も子どもの前で繰り返してきた行為ですが、子どもはこれを一歳三ヶ月頃から真似するようになり、二歳頃にその完成形を見せるようになります。

砂型づくりに適した物に砂を詰め、上から押しつけ、ひっくり返し、トントンとたたいてからそっと持ち上げる。この一連の行動はまさに使用する物の理解とその物に応じた働きかけです。またこの作業は、乾いた砂ではなく少し湿った砂を用いるという砂の状態の理解と、砂がこぼれ落ちないようなスピ

ードで素早くひっくり返すといった運動能力が求められます。これこそ次の段階「砂で遊ぶ砂遊び」の重要な要素です。【写真 8】

(写真 5～8 挿入)

(3) 砂で遊ぶ砂遊び

第三の「砂で遊ぶ砂遊び」のフェイズは、子どもの手や他の身体部分が直接砂に触れることが増え、砂の状態や形状に関心が向き、自分の手で砂の変化を引き起こしていくといった行動が特徴となります。

典型的な遊びとしては、泥団子作りがあります。子どもはまず砂と水のほどよい調合を図り、核となる砂の固まりを作ります。【写真 9】それを両手の間で転がしてきれいに丸めながら、さらに乾いた砂をかけたりして徐々に湿り気をなくしていきます。このとき力が入りすぎれば団子は壊れますが、ある程度の力を入れなければ逆に砂は固まりません。【写真 10】子どもは、砂の状態変化を作り出す科学者のようであり、ていねいな技をじっくりと発揮する職人のようでもあります。

砂で遊ぶ砂遊びには、他にも大きな砂山作りやトンネル掘りなどがあります。どうすれば、より高い山を積み上げることができるのか、どんな穴を掘れば山が崩れずにうまくつながるのか。【写真 11】これは砂の持つ物理的な特性への挑戦です。また腕や足を深く砂に埋めることを喜ぶ姿も見られます。【写真 12】

砂で遊ぶ砂遊びの出現は、手や腕の力の増加とともに、手や指を微妙かつ思い通りに動かすことのできる操作能力の向上、そして砂の感触をより敏感に感じ取ることができるようになったということが背景として考えられます。また、すでに述べたように砂そのものの状態や形状、強度等、自然・物理的な法則性への経験的な気づきが求められます。

(写真 9～12 挿入)

(4) イメージと言葉が広げる砂遊び

きれいに型抜きされた砂の固まりが皿の上へのせられ、子どもたちは「どうぞ」「いただきます」などのやり取りをします。砂のお好み焼きに「熱いから気を付けて」という気遣いの言葉も添えられます。

ある日、子どもと先生と一緒に砂場中央に砂を積んでいました。先生が「何味のシロップがいいですか」と尋ねると、子どもたちは「イチゴ」「メロン」と返します。うずたかく積まれた砂は、どうやら「かき氷お山」だったようです。【写真 13】

また別の日には、砂山にフープとスコップが組み合わされ、そこに子どもが座って何やら唱えています。実はそれは「変身トイレ」なるもので、そこに入って用を足すと何でも好きなものに変身できるという設定でした。【写真 14】そんな子どもの考えを注意深く聞き出していた先生も、最後にはそのトイレでスイカに変身しました。

ときに砂場は全体が線路になり、電車も走りました。子どもはまるで電車か、電車の運転手になったようです。【写真 15】またあるときは、先生の誕生日を祝おうと、砂のケーキの回りに集まってハッピーバースデーを歌い、ろうそくの火を吹き消していました。【写真 16】

生活の広がりと言葉の獲得とともに、子どもたちはいろいろなイメージを膨らませ、砂を使ってその思いを形に表わしていきます。また、その思いは一人の中にとどまることなく、言葉によって他の子どもたちにも伝わり、砂を介した人間関係が作られ共感が広がっていくのです。砂は子どもの思いと言葉

を引き出し、友達をつなぐ重要な素材となります。

(写真 13～16 挿入)

(5) アートとしての砂遊び

年中から年長にかけて、子どもたちの関心は動きやルールのある遊びに移り、徐々に砂場の外での遊びが増える傾向が見られます。あいちゃんたちにもその姿が見えてきた頃、私たちは砂場に左官屋さんが使う木ごてと金ごて、さらに底をくり抜いた大きなバケツを導入しました。

子どもの手の平の三倍ほどある木ごてはシャベルのように砂を掘り、ブルドーザーのように砂を集めては簡単に押し固め、しかも驚くほど肌理細かく砂の表面をなでつけることができます。【写真 17】金ごては、包丁のように砂の固まりをスパッと切ることができ、垂直のきれいな断崖や砂の階段などが作れます。そして底が抜かれたバケツはひっくり返して砂と水を入れて押し固めることで、特大の砂型が作れるのです。【写真 18】

これらの道具を見た子どもたちは、すぐに自分でもやってみようとしています。ちょうど砂で遊ばない砂遊びのように、新しい物への好奇心は高まります。ただ、以前と違うのは、子どもたちはすでに、道具を使うためのそれなりの身体の動きを身につけており、自分のなかに設定した目標に向かってその力を発揮し、創作の達成度を自分たちで評価できるようになっているという点です。

つまり、砂でこんな形を作りたい、こんな模様をつけたいという思いと、それに向かって何度も挑戦し、できたときには友だちと喜びを分かち合うとといったことができるのです。これこそアートとしての砂遊びの展開です。【写真 19】

小学校への入学を数日後に控え、子どもたちは最後の砂遊びをしました。六年間遊んだ砂場でこれまで獲得してきたあらゆる砂遊びの技を駆使し、大好きだったお話「エルマーのぼうけん」を砂場全体に作ったのです。窓やドアが掘られた大きな砂の家々、川や橋、「ごびごびさばく」や「ほたるとうだい」、「みどりこうえん」が砂場に現れ、みんなで力を合わせて川に水も流しました。最後は、自分たちの作品を園長先生に誇らしげに紹介して、保育園最後の砂遊びを終えました。【写真 20】

砂場に現れた子どもたちの作品、それは子どもたちの思いや願い、物語の世界への没入、道具使用の上達過程、友だちや保育者との関わりや共感といった、保育園時代のあらゆる場面が息づく集大成でした。

なお、一般には砂遊びがフェイズ4の局面で終わる幼稚園や保育園も多く、砂遊びは年長には不向きな遊びと思われることも少なくないようです。しかし、保育者自身の砂遊びへの理解と子どもたちのやりたい気持ちを引き出す関わりがあれば、「フェイズ5」の「アートとしての砂遊び」の展開は十分可能です。このことについては次の中村孝博氏の実践報告をご覧ください。

(写真 17～20 挿入)

2. 砂遊びを通した子どもの多様な発達の要素

砂遊びの観察を通して改めて強く感じたこと、それは、砂遊びは子どもの様々な力を引き出し伸ばしていく、多様な要素を有しているということでした。それを模式化したのが図1です。それぞれについて

て概観します。

(図1 砂遊びが引き出す子どもの力 仮説) 挿入

①感覚 子どもは特に、視覚的・触覚的に砂との関わりを深めます。砂の色や形に関心を向け、乾いた砂、湿った砂、泥状の砂の違いを手指で感じ取ります。また、砂の温度や重たさ、圧迫感なども感じます。

②情緒 砂は、子どもの身体や動きをいつもそのまま受け止めます。砂に触れる心地よさは癒しでもあり、また遊びへの集中を誘います。砂場では子どもたちの落ち着いた姿が見られ、子どもにとっては、安心できる外遊びの基地のようです。

③身体運動 砂という不安定な場所で、子どもは足下をしっかりと踏ん張りながら身体を支え、バランスを取ります。また道具類を使うときも、姿勢を整えたり、道具の形や大きさに応じた動きをしていきます。

④物の操作 砂や物に対する手指の細かな動きは、砂遊びの中で常に見られます。この繰り返しを通して道具類の扱いを上達させ、泥だんごを壊さないように固めたり、砂に彫刻をしたりといった細かな作業もできるようになっていきます。

⑤ことば 砂遊びのなかでは、子どもたちから色々な音声や言葉が出てきます。子どもは砂遊びを通して自分の感じや思いを語り、人との会話を広げます。またイメージを膨らませていくことで内言の活動を活発にしていきます。

⑥社会性 仲間と共にコミュニケーションを図り、砂で作る物のイメージを共有し、協力、協同します。また、小さな子どもの面倒を見る年長児の姿や、時にはけんかや仲直りの場面もよく見られます。友達への気遣いをしたり、友達からほめてもらったりしながら関係を深めます。

⑦想像と創造 砂場では子どもたちの生活やお話の世界がよく現れます。砂で作ったプリンやお好み焼き、食事や誕生会等の出来事、電車、怪獣等々。経験をもとにした想像が砂の上に形となって表れ、逆に砂の形や状態が子どもの想像と新たな創造を広げたりしています。

⑧認知 砂遊びは砂や使用する物との直接対話であり、その経験を通して子どもは環境を理解していきます。砂の湿乾や温冷、硬さや柔らかさ、物の形や大小関係、上下左右、砂をすくう角度や力の大小、山の高さ、穴の深さや大きさ、そしてそれらを表現する言葉の獲得。砂遊びは、多様な学びそのものです。

⑨科学的態度 砂や水の配合を調整して泥だんごを作ったり、砂に水を流して水が浸みていく様子を見たり、砂山を壊さないようにトンネルを掘ったり。これは、自然の法則への挑戦であり、気づきです。同じような繰り返しも、子どもにとっては見通しと結果を突き合わせるための実験そのものです。

⑩自己 砂山に登り切ったときや自分の思い通りに物が使えたとき、あるいは砂型が完成したとき、子どもは喜びの表情や言葉を発します。また、失敗しても何度も挑戦したり、道具のスキルアップを図ったり。このような経験を通して子どもたちは集中や忍耐、達成感や自信、自己肯定感を深めます。

砂遊びに見られる十項目の発達の要素をあげてみました。今、砂場にいる子どもの動きの中に、どんな要素を見いだすことができるでしょうか。

3. 考察

以上、長期観察もとに、二つのことを提起しました。一つは、砂遊びの展開仮説であり、もう一つは、砂遊びが引き出す子どもの力の可能性です。

前者は長いスパンでの砂遊びの把握であり、後者はむしろ瞬間瞬間における子どもの動きへの着目とその分析的な把握ということです。いずれも、「砂遊び」を漠然ととらえることを見直すための提起ですが、これは具体的にどのような保育課題につながっていくのでしょうか。

まず、子どもが使う物（道具類）はどうなっているのでしょうか。1年を通して、また年齢の違いをさほど考慮することなく、同じものがいつも同じように、ただ砂場の周りに置かれているということはないのでしょうか。

また、いかにも砂遊び道具として考えられるようなものしか用意していないということはないのでしょうか。市販の道具類の他にも、様々な家庭用品、台所用品、植木鉢、木の板、丸太、棒、太さや長さの違う塩ビ管、雨樋、ボール類、フープ、段ボール、大きなシャベルや手押し車、滑車、それからすでに紹介した底抜けバケツやコテ類、ペンナイフ等々も是非使わせてほしいものです。他にも意外な物が意外な形で使用されます。子どもたちの経験度合いや季節、時期、天候に応じて、様々な物の提供を工夫したいものです。

次に、砂場の状態はどうでしょうか。柔らかな砂がたっぷりと入っているのでしょうか。表面が固くなっていたり、砂がほとんどなくなっていたりということはないのでしょうか。また、砂場はいつも、砂が平らに敷かれているだけという園も多いのではないのでしょうか。時には、砂場にデコボコをたくさん作ってみたり、大きな砂山をいくつか連ねてみるのも楽しいです。いつもと違う砂場の様子に、子どもたちは大興奮で跳びはねたり、転げ回ったりして遊びます。

また、一口に砂といっても、いろいろな種類の砂があります。グレー系の砂、黄色味がかかった砂、真っ白な砂など、種類によって見た目や雰囲気はがらりと変わります。

さらに、砂粒の粒子の違いによって感触もずいぶん違ったものになります。砂を固めるときの細工のしやすさも違ってきます。特に「フェイズ5」に挑戦するのであれば、ある程度、細かな粒子がそろった砂を用意するのがよいでしょう。これは砂の購入時に、業者さんにお問い合わせがかなうことです。

最後に保育者による砂遊びのとらえ方と子どもとの関わりです。これまで、漠然と見ていた子どもの砂遊びに、展開仮説や子どもが獲得していく力の可能性を意識するというのは、保育者にとってはどのようなことになるのでしょうか。

それは、砂遊びの指導に一定の見通しをもつことであり、子どもの砂遊びの意味をもう一步深く探ることであり、さらに自分自身の子どもの関わりの仕方や砂遊びの環境設定の課題を強く意識することです。まさに、より丁寧なまなざしと仮説をもって子どもの砂遊びを見つめることにつながります。

見通しや仮説を持つことにより、それに基づいた振り返りも可能になります。子どもたちは自分の思っていたような遊びを展開していたかどうか。もしその通りでなかったとすれば、それは環境構成のせいなのか、自分の関わり方の問題だったのか。もちろん保育はすべて見通し通りにいけばよいということではなく、全く予想外の新しい行動や展開を子どもたちが見せてくれたという楽しい発見もあるでしょう。それはそれで、また次の仮説のなかに取り込むこととなりますが、いずれにしても、一定の仮説や何らかの視点を持つということは、自分の保育行為をより客観的にとらえていくという点でたいへん

重要です。

子どもは砂遊びが大好きです。よく集中して砂場で遊んでいます。そのために、砂場に子どもがいさえすれば、つい保育がうまくいっているとも思いがちです。でも、環境や保育者の関わりが乏しければ、子どもたちの達成感や満足度は大きく下がります。

砂遊びとは子どもにとってどのような遊びなのか、子どもはなぜ砂遊びが好きなのか。保育者の意識的な問いかけこそ、保育における砂遊びのより一層の充実をもたらします。

参考

笠間浩幸 二〇〇七 乳幼児期の砂遊び 発達、第一一〇号、

笠間浩幸 二〇一〇 砂遊びは何歳になっても楽しい 発達、第一二二号